

ソ連抑留

岐阜県 中島 正 教

(旧姓 三宅)

ソ連の捕虜となりて

我が陣地の前を琿春方面第一線一二師団の兵が、敗残の姿で三々五々通過する。その中に民間人も逃げ迷いながらトポトポ歩みを運んでいる。これらに対し、我が隊は全く知らん顔で手出しをしないよう注意があった。自分の隊を守ることのみしか考えないようだ。○隊では隊長が酒風呂を沸かして入ったそうだ、というのを耳にした。また近くに糧秣集積所があり、自由に出入りできたので私も兵らも欲しいものを持ち出したが、私は練乳の缶詰を数個持ち出した。十八日に各中隊ごとに武装解除を行い、武器類一切を集積せよと通告を受けた。ただし、将校の佩刀は許すとのことであった。かくて小銃、帯剣、下士用軍刀、重機関銃などの山ができた。将校に配られたあのズン

グリ拳銃、これはどうしようと話が出て、こんなものまでソ連に渡すことはない、穴を掘って埋めよう、また取りに来ることがあるかもしれないから埋めた場所をしっかり覚えておけよと、大隊の将校はまとめて埋めた。どんなになったやら。翌日、ソ連軍がジープで確認受領に来た。そして延吉に集合を命じたので、急遽、間島の我らの連隊近くまで進んだとき、思いもかけぬ命令がソ側から発せられ、行軍途中から准士官以上と下士官以下に分離され、別れを告げる余裕もなく、将校はれんが建の二八一連隊建物へ、すなわち自分の隊に今は連隊長以下、当方面守備の将校は続々と收容された。下士官、兵は連隊より一キロメートルほど離れた広漠地に、次から次へと收容された。

私は下士官に「頼んだぞ」と言って別れたのだが、所属二八一連隊の兵との別れで、このとき朝鮮の上等兵は涙を流して隊長と行動を共にしたいと訴えたが、いかんともすることができず、「元気でやってくれ、世話になってありがとう」と言って別れたままである。自分らの兵舎に入れられた連隊長以下、狭い場所

で雑魚寝を余儀なくさせられ、ドラム缶一個と掃除道具が後日届けられた。

食事は現品を支給され、經理將校がこれに当たったが、全てが糧秣集積所からソ軍の命令で配布される関東軍所有の物資で、我らはもう命ぜられるままに行動をとるほかどうすることもできず、新品少尉はどんなときにも呼び出されて使役させられ、入隊当初のごときありさまであり、続々と未知の將校が集合してきた。

このとき連隊長は、毎日ほうきを持って掃除をされる。中尉連中が、隊長があんなことをされると困るから道具を隠してしまえと言う。私は「老連隊長にはもうお好きなようにして差し上げた方が健康上よいですよ」と具申した。「隊長があんなことをされると俺らはキリキリ舞いだぞ」と言う。とにかく新品少尉はよく使われた。

他の兵舎には民間人もたくさん入って来た。丸坊主で顔に墨を塗った男装がいる。変なのでよく見ると女性である。「何だ、女か」と言うと、「たくさん私らの

ようなのがいます。兵隊さん、どうなるのでしょうか」と不安顔で尋ねられても、「分からん、分からん」のほかは言い得ない。

その人達は開拓団で、バラバラに逃げて来た暉春方面からの人々で、「私は子供を井戸に投げ込んできました」「子供も一緒でしたが泣くので、ソ連に知れると言って日本の兵隊に殺されました」「老人は歩けないと言うので、泣く泣く途中で見捨ててきました」「開拓団には男はおりません。根こそぎ動員で老人と女と子供だけになり、ソ軍に侵入されバラバラになり、やっとここまで来ました。来られたのはほんの一部で、大半は死んだか、どうなったかわかりません」等々を聞かされた。

新品少尉の毎日は、水汲み、飯上げ、後始末など、ちようど入隊時の初年兵同様で、あとは皆、上級者ばかりだから処置なしである。

ある日「司令部で三宅少尉を呼んでいるぞ」との知らせを受け、「俺は司令部に呼び出されるような覚えはない」と言ったが仕方がない。意を決して、隊内の

一角に負けて逃げることに一番の司令部が、それでも参謀肩章をつけて私を呼びつけた。行って、「三宅少尉、お呼びによって参りました」と入り口で言うのと、少佐で参謀肩章をつけたのが「少尉は坊さんだそうだな」と言った。なんだ僧侶としての用事かと思ひ、「ハイ、本願寺の僧侶です」と答えると、「師団長閣下の子供が亡くなったのでお経を読んでもらいたいのだ、埋葬してあるが頼む」「ハイ、それくらいのこととは簡単なことであります。ただいまお袈裟をとってすぐ参ります」と部屋に帰り、輪袈裟、御本尊と経本を取り出し、葬儀の儀式の如く正信偈の読経を終わった。

終わってから後ろを向くと、参謀と副官は厚く？礼を言った。すると女性の一群が後ろから私を取り囲み、私にもお経をお願いしますと言ひ出した。七、八人はいる。これにいちいち正信偈を読むことはできぬし、そうかといって合併では満足しないだろうから、「お経は短い。が一人一人読みます、功德には変わりありませんからご安心下さい。皆さん大変でしたね、子供さんが多いでしょうが、御老人を亡くされた方もあ

るでしょう、さあおつとめを始めます」と一人一人に読経した。

「何もお礼できませんが、どうもありがとうございます」と礼を言われるので、「どうか気を丈夫に持って生き抜いて下さい。貴方がたの無事を亡くなった方々はきつと守って下さいますよ」と申した。私は軍隊で初めて読経し、持ってきた本尊、袈裟を押しただいた。

作業大隊編成

下士官、兵の幕舎では一、〇〇〇人ずつ收容し、一、〇〇〇人になるとまた次の囲いの中に收容するというのが次から次にできているらしいが、詳しいことは分からない。将校收容所で急に呼び出しがかかった。呼ばれた者は七人ずつ並ぶよう指示して、「〇〇少尉、〇〇少尉」少尉ばかりである。五人が兵科で、主計と軍医が入り計七人の呼上が続けられる。もう六組も呼ばれた。次は石川少尉、長田少尉、大島少尉、川口少尉、三宅少尉、松本主計少尉、小松軍医少尉の七人が呼ばれ、まだ次が続いていた。かくて指名され

た者は引率され、下士官、兵の収容所に到着した。

原っぱの囲いの中で小隊くらいが思い思いの幕舎、板囲い、トタン張りなどの急造の雨しのぎの寢床を造っている。炊事は幕舎の隣で名々やっている。水はどこかで受領しているようだ。糧秣はまだ各隊所有のものを使っているらしい。大変なのは厠だ。ところ構わず大便が排泄してある。踏まないように進んで、石川少尉以下七人は入れられた隊内を一巡した。まず、これらの基本方針を定めねばならず、暫時打ち合わせをし、中に収容されている上級者に緊急集合を命じ、第一に厠の場所決定と使役にて穴掘りを強行させ、人員九九三人を確認すべく曹長に命じた。我等は「間島編成第七大隊」と呼称することを伝え、本部員を約三十人とし、残余を平等に区分し四個中隊づくりを命じて初日を終わり、編成を先任曹長に一任した。

翌日、七人の将校は隊に至り、本部員及び各中隊の編成を終わった。私は第四中隊長で四個小隊を整列させ、小隊長を務める曹長四人より報告を聞いて、簡単に「目下我等はソ連軍制下に捕虜としてあるも、ポツ

ダム宣言によれば、戦闘せし者も速やかに故郷に帰し平和産業に従事せしめる、とあるから、遠からず帰国できると信ずる、それまで命令に従って日本軍人として恥ずかしくない行動をとるよう」要望した。第一小隊島崎敬次、第二小隊蒲敏勝、第三小隊大郷、第四小隊佐藤の各曹長が小隊長である。第三小隊までは重砲三連隊で、近衛文隆中尉の中隊がそのままであり、第四小隊は羅南の山砲七九連隊であることが判明した。一から三までの小隊の兵を見ると、全員甲種合格の体格をしている頼もしい兵士で、第四小隊はもう全員乙種のように弱々しい兵であった。

中隊としての正式編成を終わって休憩に入ったとき、島崎曹長を呼んで、「私事であるが、近衛隊長の奥さん正子夫人はどのようなになったのか」と尋ねた。島崎曹長は「夫人は、兵二人を付けて新京まで送らせました、ただいまその兵を呼びますから直接お聞き下さい」と答え、兵を呼んだ。呼ばれた兵二人が来たので様子を尋ねると、「新京の西本願寺までお送りして姫宮とか言う輪番さんに間違いなくお渡しして参りま

した」と明言したので、「お元氣だったか」と尋ねると「お体には何の異常もありませんでした」と答えた。私は「よかった、よかった、ご苦労であった」と兵をねぎらった。

この間に、某所から各隊に、「関東軍防疫給水部（七三一部隊の別名）の下士官や兵が隊内に潜り込みをするやもしれないので、正式に受領した下士官以外で所属の確認できない者を、いかなる理由があっても自己の隊に加うるべからず」という命令が届いた。私はこの隊名を聞くのは初めてで、立派な隊でないのか、どうしてこの隊の兵を拾い上げてはいけないのか分らないが、守りましょうと記憶したものである。後日、この隊が森村誠一著の『悪魔の飽食』の根元となる隊で、その後延々と続く元東京教育大学教授、家永三郎先生の高等学校教科書裁判の主題になろうなど、夢にも思わなかった。

この裁判の中の一項目に、我らの宗祖親鸞聖人の修行証末文の記載をせられた教授に文部省は抹消を求めている箇所もあるので、私にとっては捨ておけない

裁判となろうなど知る由もないことであった。

第四中隊長は弱兵出身の私、一、二、三小隊員は関東軍随一の強兵。この配置の間で近衛正子夫人の件が私を大きく引き立たせてくれた。〔平成二（一九九〇）年の秋、旧捕虜の会「宇山会」で松本元主計が私に語ったのは、「最初、三宅少尉を見たとき、三カ月も命がもつかなと感じたが、四十六年後の今も生きている、命とは不思議なものだな」としみじみ語った如く〕と言うのは、「少尉殿は何故近衛夫人のことをあの様に最先に心配されましたか」と後日、島崎第一小隊長に聞かれて、「自分は西本願寺の僧侶で、宗門の最高は法主（当時。現・門主）と言う。この方は親鸞聖人の直系で他の者が代わる訳にはゆかない。その法主の妹が正子夫人で、法主は天皇様と正真正銘の従兄弟で、我らにとってかけがえのない尊いお方だ。軍人の天皇様のようなものだ。その妹さんが近衛隊長の夫人だから、お前達が近衛中隊だと聞いたので真っ先に尋ねて安心した訳である」と。

こんなことが旧近衛中隊の兵隊にも伝わって、何と

なく親近感をもって私を守ってくれたと心中、常に感謝していた。この因縁で近衛正子様には何回かお目にかかることができた。昭和五十六（一九八一）年三月十七日には、築地本願寺にて東京親鸞会（会長 近衛正子様）の例会の御法話を拝命し、法話が敗戦時のことに言及し、三十分の与えられた時間をオーバーしたことがあった。

ソ連へ出発

間島編成の第一大隊は九月初旬、出発した。どこへ帰るのかとソ連兵に聞けば「トウキョウ・ダモイ（東京に帰る）」と口を揃えて答える。これで誰もがウラジオ經由東京送りと信じて疑わなかった。このころでは、ポツダム宣言は兵までよく知っていた。第七石川大隊が間島を出発したのは七日ごろであった。敗戦直後、物資集積所に自由に出入りできたとき、軍衣袴、軍靴、その他衣類、食品、主として缶詰など持てるだけのものを兵は持っていた。ひどい者は軍靴三足も腰にぶら下げている。中隊には馬車一両が配属され、大隊指揮班に属し、私の隊からも八人の本部長を出して

いるので、私以下二四二人だった。青山八郎軍曹、山本繁夫候補生などを本部に送った。

かくて間島からウオロシロフまでを一、〇〇〇人の行軍が始まった。長い行軍序列になると先頭ほど楽であり、第四中隊の我が隊は始終遅れる兵のため、延々と長い隊形の後尾を整えるのに苦勞した。

一週間ほどの行軍は、早朝出発、暗くなって野宿だが、我が軍はすぐ天幕張りにかかる。ソ連歩哨は山野雑草の上に銃を抱いたままごろ寝で、食事は黒パンに小川の水を飲んで平然としている。我々には、黒パンを配給してくれても、とても喉を通過しない。持ち合わせの練乳をつけ、毎日毎日これを食べた。各分隊で米を炊くこともあったが、用具は乾燥野菜の缶で、だんだんと慣れて上手に飯と汁ができるようになった。

行軍中、休憩すると兵らは排泄に林に入る。すると、そこに兵の死体や軍馬の死骸を発見し報告に来るので、部隊名、氏名を報告させるのであるが、なかなか注記がなく、また新品着用者は一切記名がないので、やむを得ずハエの発生しない程度に埋めさせて出

発をする。

途中、暉春師団司令部のあった場所を通過した。司令部が機動力を利用して一番に逃げたと言われるだけあって、戦後半月を経過しているのにマル秘の文書が風に吹かれて散乱していた。大分慌てて逃げたのだから、十分焼却もせず半焼きで引き揚げた無様な跡は見苦しいものだ。引き際の重大さを知らされた。

三日目、夜到着と同時に露営した。その折、近くに民家が一戸あった。多少離れているので問題にせず、大隊命令で民家に立寄りを禁止した。ところが翌朝出発に際し気がつくとき、この民家は土台だけ残して跡形もなく消滅していた。戦争の一コマであるが、もし本土であつたら一部落は一夜のうちに消されるだろう。戦場になった国土は焼土と化する。日本では空襲で、また沖繩で一部、この姿があつたが、全体としてはあまり深刻には受け止められていないようだ。

四、五、六日と行軍が続くと、所持品を捨てた兵がふえた。三足軍靴を持った兵は一足だけを腰から下げ、二足は捨てたようだ。私は三中隊の川口君に隊の

掌握の件を何度も抗議するが、彼はのんきなもので、どれだけ隊列が延びても平気である。第四中隊はこのため半ば駆け足を繰り返さざるを得なかった。

二日目の夜行軍中、何事か異常な状態が発生し、発砲音を聞き、急いで駆けつけ「何事だ」と叫んで眺めると、そこに倒れているのはソ連の監視兵である。不思議なので「どうしたのだ」と行軍中の兵に聞くと「ソ連兵が我々の時計をかすめに来てゲーペーウ（国家政治保安部）らしいのに射殺されました」と答えた。

私は耳を疑った。撃たれたのは日本兵でなく、護衛・監視についているソ連兵だ。当時、時計を見れば強奪するのがソ連兵だ、と皆隠したが、ときどき取られるのがいた。それがゲーペーウに即刻射殺されたのを目前にして、日本軍は軍法会議にかけるのにソ連はやる時にはやるもんだな、ゲーペーウとはいずれにしても恐ろしい生殺し奪の権を持っていることに驚いた。

四日目くらいであろうか、暉春を過ぎるころからい

よいよ体力に疲れを覚え、各兵は集積所から持ち出した衣類、軍靴、日用品などまでも捨て去って、夢遊病者のようにふらふらする者まで出だした。

食べ物も十分でないので、道中、開拓団の畑でもあらゆるものなら手当たり次第もぎ採り、口に入れる有様となった。ニンニクを取って私も生のまま食べたが、口中火傷のようになってしまった。畑が見えればバラバラと入り込み夢中で掘り出し、生で齧る。とてもかつての関東軍の精鋭とは思われない。途中、国境問題で昭和十三（一九三八）年七月、日ソ両軍が衝突した張鼓峰を左手に望見しつつ行軍するのであるが、この事件とて我が軍の大敗であったのを軍はひた隠しにして、参考にしなかったのであった。

行軍の道を軍用トラック（米軍の援助物資）が唸り上げて砂塵を巻き上げ、猛スピードで何十台と通過する。全く危険この上ない行軍であったが、第四中隊の私は長く延びてしまった中隊を必死に縮めるべく努力し、走り回らねばならなかった。

ソ連領入り

行軍七日目、国境を越えた。国境は、我々の見たこともないブルドーザーで一挙にならされ広くて平坦な道路に変わっていた。遙か向こうに国境守備隊の宿舎が見え出した。そのころ私共は捕虜として顔を見られることを嫌い、マスクをかけて行進した。大勢の国境守備隊員の家族が見物にやって来た。不思議に全員素足である。私はカンボイ（監視兵）に「ロスキーはあわてん坊だ、日本兵を見るために靴も履かないで飛び出して来た」と通じないながらも言うのと、彼らは手まねで「違う、日本は今お前らが着用しているような立派な服装用具を整えたが、飛行機も戦車も作らないで敗れた。ソ連は不用な服や靴など作らないで、もっぱら戦争に役立つ飛行機・戦車・自走大砲を作った。それだけ違うのだ」と言った。事実、入ソして時たま散見したソ連軍砲兵の自走砲は、走り止まり台座を下ろすと直ちに発射する。日本は当時まだ鞍馬で砲をひいていた。歩兵は三八式（明治三十八（一九〇五）年制定）を使い、一九四五年の敗戦まで歩兵の第一の兵

器で、五発充填し一発ごとに槓桿を操作して弾丸を送り、引き金を引いて発射する。特に歩兵の斥候がこれを所有し、パッと敵と遭遇したとき狙いを定める余裕はない。あつても一発一発「ガチャガチャ」と槓桿操作で弾を送り、どれほど正確に当たっても、バリバリと何十発もやられては、アツという間に倒されてしまう。これで米兵にあつさりやられて何の偵察もできず、また米軍はリーダーを早くから使用した。

全く研究不足、負けるのが当たり前であり、ソ連戦車、砲車、米軍より支援のトラック、ブルドーザーの大行列を見たらとても相撲にならないことを見せつけられ、何も知らずに勝つ勝つと思っていた方が不思議であった。(私自身は勝つと思つたことがなかったのは、開戦半年後のミッドウェー海戦のときから一貫していた)

カンボイの言葉に反することができなかった。その折将校の間で、「日本でこれほど徹底してやったら反乱が起きるかもしれないぞ、日本人はこれほどの苦しみに耐えきれぬのだらうか、スラブの底力を見せつけ

られたように寒気が背中を走る」と言う者がいた。

捕虜の日本兵はバリツとした服装、勝者のソ連兵は入浴もなく全くの夜営で、川の水を飲み、黒パンをかじり、破れ破れの服、軍靴でドイツを破り、今また日本に打ち勝つたのだ。日本軍はあまりにもみじめでないかと言いたくなった。

国境を越え、素足のソ連の民衆の前を通過する我々に、子供達は石を投げつけ、近寄って「ミカド、ハラキリ」と口々に罵り、唾を吐きかけてくるのであるが、我が隊将兵は疲れ果てた体を気力をもって無関心に黙して、ウオロシロフの丘に行進するのであった。ウオロシロフの丘からは遙か彼方に煙を出して走る長い列車が見えられ、丘の上には秋草の花、特に桔梗が一面に咲いていた。我らは何日か後、第七大隊だから案外早く東京へ、故郷へ帰れるとの思いはつのるばかりである。

軍人は出征の折、村人から万歳万歳と見送られて、戦うために来た。それに比べ開拓の人々、民間人は国策に沿って進んで東満に来た。そして思いもしない苦

難に遭遇し生命まで失った。軍人が死ぬのはもう当たり前のことで、民間人は非戦闘員である。それらの人々が多く死んだ。民間人にこそ、国がその保障をすべきだ。もちろん、軍人以上にやるべきで、これが国の正しい行政ではないのか。それなのに軍人が常に優先である。これは根本的考え方に間違いがあるのではないか、と行軍中思えて、私はこのまま帰ることが恥ずかしいと思っていた。

何日待ったか、乗車命令により全荷物を運び入れたのは有蓋貨車で、上部に一カ所二〇センチメートル角の窓一つ、中央には小便所で、車外に流れるようしつらえられている。それ以外の所にギューギュー詰め込んで、全員十分横になれない状態である。

このころ私は高熱が続くようになった。雨中、戦闘開始から一回シャワーを浴び消毒したきりで、着替えなどほとんどしていない。もう身体じゅう虱が何十匹と生血を吸っている。単なる風邪なればよいが、小松軍医も所持する薬は靴一個しかない。三九度の発熱でも四個小隊を引率する責任があると、気力一つで車中

生活が始まった。体がえらくてえらくてふらふらである。なるべく車中で横臥した。

六日くらい乗車したが、いつ走りいつ止まるかさっぱりわからない。止まると食事当番は車外で、分隊単位で缶で炊事を始める。ポーと汽笛が鳴ると、出るのが出ないのか、缶を乗せるかそのまま続けるかは食事当番の腕次第、指揮官の我々にも一切なんの連絡もない。

缶の食事が八分ほどできた班があった。列車がポーと動き出し、また止まるだろうと思っている間に、どんどん走り出し、一個分隊一日分の食事と兵三名を置いてきてしまった。

これは大隊長には報告したが、当分の間一、〇〇〇人で通そう、あの三人は次の隊が拾って来る、心配は要らんと言うことで、約一カ月知らぬ半兵衛で通した。後で発見されたけれども何事もなかった。

夜行列車の窓から天空を眺めていた兵が「オイ、この列車北へ走るぞ、今日で五日目だ、とてもウラジオに向かっているとは思えんぞ」と言い出した。薄々そ

んな気がしないでもなかったが、そのとき遂にだまされたと気づいた。果たしてどこに行くのか。ハバロフスクに着いたらしい。小用くらいは達せられるも、それより遠くへは行くことができない。

ここで長時間をとり、また動き出した。寒さが身に少々こたえる。大分北に來ているぞと。それからまたどれほどか走った。木の切り株が地上一メートルくらいのところで皆切つてあるのが窓外に見えるところで列車は止まった。ここがコムソモリスクと言うところであり、ここで約二年半を過ごすことになった。あまりにも苦しい北辺の土地であった。

コムソモリスク第五分所へ

隊列を組んで十月七日着いたところは、草原の中の二階建の外観は立派な兵舎のように見えたが、内部をのぞいてみると窓ガラスは一枚もない。水道も電灯も厠もなく、ただ屋根があつて雨に濡れないで済むだけだ。(コムソモリスク・第五分所)

この部屋はせいぜい二〇人くらいの所に五〇〜六〇人くらい入れられ、上を向いては寝られず、皆、体を

横向きにし肩を下にして、魚を詰めて並べるように寝た。夜中に小便に出ると、帰つて來て自分の場所に入ることができず、隣の兵を横向けにしてもぐり込んだ。こんなことが十日以上も続いたが、作業が始まり出すと、どこからともなく用材を集め、二階、三階と蚕棚のように三段ベッドを仕上げていった。

翌日から炊事の方法、水道の件などソ連側と交渉に入つた。大隊長石川少尉は主計松本中尉(これまでに将校会議で、全員少尉ではやりにくいし、進級時期の來た古参少尉を中尉として、我が隊の建制を保とうと協議した結果)と常に協議し、四人の中隊長、軍医も加わつて、日夜ソ連側と交渉し、火の焚けるよう、そして入浴の件が取り上げられ、まず水道、次は厠。そうしないと収容所は糞で埋まってしまう。兵力を集中して大きな穴を掘り、横に長く一二メートルくらい、幅は狭く二・五メートルくらいのを二カ所掘つた。二メートルほどの深さにし、幅の狭い方に板を渡し、板の中央に便口を設け、一列に並んで排便する。前者の排出状況がよくわかり、病気の発見には思わぬ役に

立ってよかった。

二カ所の厠に囲いがほしい。作業に出ている者に作業現場から板を担いで帰らせ、囲いはようやく完成した。

ほどなくアムール河で事故死者が出たが、その棺桶用にこの囲いの板が外されたのには驚いた。囲いを造るとき、各隊に賛否を尋ねて兵も了解の上で作業したにもかかわらず、僅かの間に外されてしまった。このとき、日本人には民主主義はなかなか理解されないかと痛感した。もちろん棺桶の相談はまだできてはいなかったが、大隊本部でも外されたのを知らなかった。しかし、死者が次から次へと出るようになり、寒風が吹き出してみると、これは自然に止まった。

コムソモリスク到着時の熱はちつともとれなく、あえぎあえぎ作業の指揮を続けていた。各中隊が一応落ち着いてきたとき、将校は一室を確保することができ、将校室に私も入った。

病氣入室

石川大隊長が私の裸を見て、小松軍医に「軍医さ

ん、三宅少尉の熱発は黄疸らしいぞ、真っ黄色な体をしとるじゃないか」と言った。

私はソ連軍侵攻以来、米飯、味噌汁、野菜にほとんどありついたことがなく、乾パン、練乳、牛肉ばかりであったので、「そうでしょう」と答えた。小松軍医は「リユウマという薬がある、これを飲むよう、さらに十日間くらい休養室入りだ」と言う。作業が気になるが、病室入りを命ぜられれば治すことが第一と決心し、鳥崎第一小隊長を呼び、当分の間、中隊業務一切を委任し、養生専一に横臥した。

幸い私が入室したのは病人の始まりで、部屋には二、三の病人がいるのみであった。軍医の鞆の中には関東軍から持って来た薬がまだあった。私はかくして十数日の入室で解除され、将校室に帰った。

作業は隊内自営作業が主体であったのが、このころから外部の作業に変わった。第四中隊で最初の犠牲者は、アムール河で木材引き揚げ作業中に他の舟が突然入り込み、これに当てられて第四小隊の兵が死亡した。また他の隊で、アムールでソ連の電線(二〇〇ボ

ルト)に触れ、体は水中電圧が日本の倍だったのでアツという間にやられたが、この兵は長い間入室し、一命は取り止めた。

退室した私は、主として五キロメートルほど離れたアマール河畔の製材工場の指揮をとった。任務は、兵員の確保、往復指揮で、作業そのものについてはソ連側の責任者が指示し、それに従うほかなかった。ここでは重労働ではなかったが、往復と食事が大変であった。途中四キロメートル近くの間は木材運搬用の軽便貨車が走っており、行きも帰りも空車なれば自由に乗ることができた。しかし無蓋車で、零下三〇度以下になると風に向かっては乗れなく、風を避け丸く小さくなって、これでも乗れば上等で、四、五回に一回ぐらいしか乗れず徒歩通勤が続いた。

五キロメートルを雪を踏んで、寒さ、労働、睡眠不足、食料不足、無灯火(当初はたいまつで明かりをとった)、衣料不足、虱、無入浴で兵の足は進まず、歩哨のロスキーには「ダワイダワイ」と叫ばれ、行列は長々と延びる。すると必ずマンドリン(連発銃)を

私の胸に突きつけ「早く隊を掌握し隊列を整えよ」と命ずる。私の主たる任務であるが、旧近衛隊の者は皆元気でよいが、第四小隊を引率するときには全く弱々しく、とても追いつて立ってなぞできず、随分苦労した。復員後、当時の部下と松山市で会ったとき「何回ぐらいマンドリンの前に立ったかな」と聞いたら、「二十回ですよ、それでも一度も引き金を引かれなくてよかったですね」と言われ、「引かれていたらシラカバの肥やしになっていたよ」と談笑することができた。

日本式浴場建設

かくて十月半ばごろに急に怪我や病人が出た。虱退治をするにはまず入浴だが、十日に一回のシャワーでは虱様は平気なもの、拡大するのみで、さらに南京虫まで随所に出だした。こうなると、どうしても日本式の浴場を建設しようと、将校は一致してソ連当局に何回も何回も交渉したが、彼らは、シャワーこそ最上の入浴で日本式は不潔であると頑として応じない。とうとう作業拒否の態度を示すと、彼らもいたし方なく日本式浴場建設を許可した。

このとき、れんがが大量に必要なことをソ連側に伝えると、全員作業で運べと言う。それは八〇〇メートルほど離れた所にれんがの山があった、これを全員一度に出て入り用数だけ持ち帰る（いわゆる、がめる）のである。心配なのは当方であるが、ソ連側は「何、国有のものが場所が変わるだけで問題なし」とのんきな返事に、なるほど、一切が国有だからどこへ持って行っても同じだとは便利なものだなと笑い合った。燃料は作業隊が作業所から、セメントも砂も、何せ一、〇〇〇人でやることだから半月ほどで完成した。

入所一カ月ほどが過ぎて、この収容所に六〇〇人の一隊が到着した。指揮官は東京城編成二六九作業大隊の河野修二大尉であった。全収容所の部屋割りを訂正しなければならなくなった。決定は石川、松本、河野等の幹部で配当したらしい。私はこういうことは公明正大にやるべきだと常に思っていたが、実際に決められた現場に立ち会って見ると、今度来た隊の某准尉がバカに大きい部屋を占領し、第四中隊は狭い所に押し込められている。私が本部から配置表を取り寄せてみ

ると、明らかに侵入されている。これに立腹して准尉に掛け合いに出かけた。准尉は軍隊の飯を私らの何倍も食っている。星の数など問題にしない。このとき、まだ私の手元に軍刀があった。今日まで一度も切りつけたことがなかったが、今日この無理なことが通るなら、この准尉と刺し違えても決着をつけると乗り込んだ。

初めはグズグズ言っていたが、「図面と人数もつてすれば第四中隊がこの室を利用するのは当然だ、俺はここで刺し違えても決着をつける」と言うと、少尉の言う通りにすると彼は引き受けた。こういうこともやるべきときにはやらないといけない。このとき以来、惣田准尉とは別れるまで胸襟を開いて語れる仲となった。

かくて第五分所は一、六〇〇名となり、再編せざるを得なくなり、河野大尉が最先任であるので大隊長とし、六個中隊、内、石川隊は四個中隊で石川少尉が、あと二個中隊はそれぞれ隊名を付し、計六個中隊として運営することとなった。

コムソモリスクとは「共產主義青年同盟（コムソモール）」という意味で、新興の街であり、街の中には切り株がそのまま根をつけて立林し、大筋の道と駅からしからぬ駅と宿舍などで、工場としては製鉄、製材、れんが焼き等で、今まさに勃興しようとする新興都市であつたので、急がねばならぬ作業が各種存在した。主たる作業は住宅建設（六階）、水道敷設、製鉄、れんが製作、森林伐採、農場作業、その他満州全土より搬出したあらゆる物品、建設機械、工場機械の車より卸下（しゃが・下ろすこと）等々と、あらゆる作業に昼夜時間をかまわず引き出され、その都度また点呼がある。その点呼たるや、一、六〇〇人の点呼には必ず一〇人ずつ並べて計算する。一〇人でないと計算ができない。零下三〇度以下で急に点呼でもされようものなら二時間くらいかかり、骨の髄まで凍る思いだ。ツツカケなどで出たらひどい目に遭わねばならぬ。

極寒は満三カ年の間で、私が自分で確認した寒暖計は、無風状態で零下五二度を示していた。風が吹けば

体感温度はさらに下がるのである。

零下三〇度で作業は打ち切りということに決められてはいるが、毎日三〇度を超えるから四〇度まで作業させられる始末であつた。

昭和二十年十二月になると病死者が出始めた。「食糧不足、ソ連側発表の通りであれば日本内地と大差がない、ソ連はそんな無茶なことはしなかった」という投書が昭和の終わりが、新聞に書かれたのを見たが、それは知らない人の言われることで、本当に最初は指示通りたとえ配給されたとしても、何回も何回も手を渡って来る間に五分の一くらいはなくなり、作業隊に支給される折には四分の一減とは言わないまでも、それに近い量の支給になるのが実情であつた。

在ソ中、捕虜にとつての四大苦は、重労働、食糧不足、極寒、伝染病に尽きる。労働としては、平時の状態で健康で十分な食糧と休養があれば、これらは大したことではなかつたはずであるが、上記の四件が重複して地獄の苦しみを味わわねばならなかつたのである。

食糧は当初、関東軍蓄積の三カ年以上使用に耐える食

糧を使用するのであるが、これがルートは守られず、シベリアまで届かなく、実に微々たる配給に終わり、栄養失調続出となつて六五、〇〇〇人以上の死者を出すことになつた。

私自身も、朝食時に昼食用のパンも食べ終わる。そうしないことには朝食のお腹が承知しない。すると、昼食はスプーン一杯の粟か稗と岩塩、バターは分隊単位、何日かに一回の塩ニシン、砂糖少々、これで日本兵の行く所、雑草はすべてなくなるといふことになる。雑草をこの中に混入して雑草雑炊を作る。これは食缶を傾けて口中に流し込むので、箸は要らないほどやわからで腹持ちしなかつた。夕食にはたまに箸を使うくらいに食事があつたが、栄養失調で隊員の肌は鳥肌となり。鳥の毛をむしつたような状態になつた。炊事はこれを心配し、松葉水を飲ませビタミン補給を凶つた。私は今日でも、食べられる雑草か否か、草を見るに直観的に頭に浮かんで来る。

ヨモギを飯盒一杯煮たが、これは口中で広がって食べられない。百合の花では一晩じゅう下痢。青ガエル

は臭くてだめ。ヘビは上等だが三年間に一匹しか入手できず、一人に二センチメートルくらいしか当たらなかつた。伝染病仲介は虱で、初めの一年間の死者の八〇パーセントを占めた。零下五二度まで体験したが、その中を生きられたのは不思議と言ふほかはない。

この記録を「随縁録」と名づけたのも、一切が私の力でなく、御縁によつて生かされてきたとの思いからである。

このような状態なので、兵は作業往復の折に馬糞を拾う。それは、これを水洗いして糞の中の大豆などで形を保っているものを集め焼いて食べる。また馬糞は馬鈴薯とよく似ている。馬鈴薯だと言つて馬糞をポケットに入れる。部屋に帰りベチカで焼くと、臭くてやつと気がつく。

食糧不足

昼間作業の食事後、飯盒で何かを煮ている兵を見つけ、「あれは何を煮ているか」と聞くと、分隊長が「例のイモですよ。これを食べれば一コロです。何度言つても聞き入れません。隊長殿、何とかして下さ

い」と言う。「あの死ぬイモか」と言う。「そうです」と答える。

「こりゃいかん、よし、その飯盒を引き揚げい」と命ずると、飯盒の持ち主は「自分がやつとの思いで手に入れたイモです。腹いっぱい食べられればもう死んでもよいですから、腹いっぱい食べさせて下さい」と言う。

「馬鹿者、そんなことでどうする。生きて日本に帰るんだ。齒を食いしばって頑張れ。誰も同じことだ。草をもっと探して、草で量を増やして頑張れ」と私は飯盒を引き寄せ、熱さも冷めたころ、隣の兵に「イモを池の中に投げ込め」と命じ、その兵を勇気づけるのに大変だった。このような状況下に置かれると「もう死んでもよい」と弱音を吐く者が出るのである。

身は中隊長であるが、作業所行きは初めはアムール河の船より荷下ろし、列車からの石炭卸下、このときも作業中零下四〇度に達した日があった。一人の兵が風に向かって小便し、陰茎が凍傷になってしまった。

「馬鹿者、早速両手で痛みの出るまで揉め」と一生

懸命揉ませた。「痛くなってきました」「今後風に向かって小便してはならんぞ」。こんなことは常に教えていたのに、兵はもう判断力も何もない。鉄棒を持つてつつ立っている。自分が凍傷になりつつあるにもかかわらず、これに対する処置をやらない無気力状態に陥ってゆく。何よりこれが恐ろしい。

昭和二十年では、まだ余興や娯楽などは何もなく、毎日生きてゆくことが大変で、将校は部下を各作業所に送り、自身は一番必要と思われる作業所、または大隊長の命によって作業所を交互に巡った。

ビルの建設は基礎の穴掘りからである。凍った土はコンクリートより固い。コンクリートなればハッパが使えるが、凍った土にハッパを使っても何の効果もない。横に掘り入れ、その下で焚火するのが最上であるが、狭い穴の中でこれをやるのは極めて危険であり、このため土砂崩れで一カ年半の間で数人の生命が失われた。

満州に入ったソ連軍は、満州の日本のあらゆる資材を搬出した。これを列車に満載し、ソ連へソ連へと運

んだ。いつ到着するやもしれぬ。到着次第、卸下作業が我々捕虜に課せられた。一大作業で、夜中であろうが夜明けであろうが列車到着次第卸下し、また次の運搬に出発するので、急ぐこと甚だしい。「作業何人、緊急出勤」と時間を問わず命ぜられると、本部は作業表により割り当ててくる。

来れば隊長は真つ先に指揮をとり、作業に向かう。新京かどこかの大病院からベッド、医療器、ゴミ箱、タンツポ、下駄、傘まで運んで来ている。また大工場の機械、これは人力では降ろせない。太いロープを用意させ全力を挙げて夜間作業。光りはほの暗い電球で危険の上もない。全くこの緊急夜間作業には泣かされた。しかも翌日は平日と変わらず作業で、代休なんでものは一切なかった。

私は病人一号であって、隊員達も、無理な所にはなるべく出さないように守ってくれたので、伐採作業に多く出ることになった。アムール木材工場にも相当通ったがまあ危険の少ない方で、ノルマもあまりきつくなかった。

ノルマ達成

ノルマ達成率によって食事に差がつくのは昭和二十一年になってからである。私は前述の如く、いくらノルマを上げて食糧を多くもらっても、穀物が多くなるだけで体力保持は無理と判断し、作業量を下げ食事量は規定だけで要求するという戦法をとった。そのため、伐採に来る者は作業は楽だが食糧は少ないと公表しておいた。ソ連の作業は当初のノルマは大した量でなく、ちよつと詰めてやれば半日で終わってしまう。

私は午前ゆつくり作業し、食後一時間くらい眠る。こんなことをした作業場は少なかった。そのため食事は最悪であったが、兵は承知で私について来てくれた。カンボーイ（監視兵）の作業介入もないので、体力の消耗は極度に押さえられた。

昼寝して作業をすると能率も上がり、四〇パーセントくらいには達せられた。かくて帰りはペチカ用の薪を一人一本ずつ担いで帰營する生活が一カ月以上続いた。監督が来ても、元来ソ連のノルマは最初は低かった、我々はその四〇パーセントくらいしか働かなかっ

たのでノルマの引き上げはなかった。第五中隊の丁少尉は、高いパーセントを得て得々と多量の食事を摂取していたが、ソ連のノルマ引き上げが急速に行われ、結果としては部下の病人を増やすことになった。かくて自分で自分の首を締めることになるのである。

作業は蝦夷松、椴松、いずれも直径一二〇センチメートルくらいで、二人押し（引かないで押す）の鋸で、鋸の動くのは一二センチメートルくらいしかなく、のんびりと作業をした。切り倒すときには細心の注意をし、私は一度も事故を起こさなかったが、死者を出した隊もあった。これは一に指揮官の責任である。

食糧の多少をノルマに合わせ作業を遂行することは自滅の道を進むことになる。私自身、体重四八キログラムでフィリピン派遣から除かれたくらいだから、作業向きにはできていなかった。

かくて大隊の将校も、ノルマ達成組とノルマ不達成組とに分かれてゆくのである。またカンボーイの作業無関心さにも大いに助かった。

作業隊員が一番多く死亡したのは酷寒、食糧不足、重労働、赤痢、発疹チフス、回帰熱等の伝染病、睡眠不足等で、昭和二十年十二月中旬ごろから始まり、昭和二十一年一二月には毎日十五人ほどとなり、最高は一日十七人であったと青山軍曹が会報で報告した。

死亡者が出ると屍室へ運んだ。栄養失調の特徴は、今まで元気だった者が突然倒れて死んでしまうという点である。私も二十一年初春、作業から帰り「御苦労、解散」と言って解散した兵が突然倒れた。急いで抱き起こしたが、もう死んでいた。食事の折、飯盒に入れ終わっても手に持ったままなので「オイ飯は入ったぞ」と声をかけると、もう死んでいる。死ぬのに何の苦しみもなく、父や母の名さえ呼ばない。まして「天皇陛下万歳」なんて言ったのは一度も聞かれなかった。楽な死に方だけが戦友としては助かった。これが苦しまれたらとてもたまらない。私自身も、いつこのようになるのかと常に思い続けるのであった。

窓辺より 見ゆる眩野の 白雪は

そぞろ寒さを 身にさそいけり

同年一月、室内で病死者が出た。小松軍医の診断で死亡と確認し、屍室に運ばせた。屍室に安置するため数体の死体を動かしたら、動くのが一体あった。よくよく見て脈を計ると動いている。兵が驚いて「生きてますよ」と言った。微かに呼吸している。よくも全裸で零下二〇数度の一晩を過ごせたものだ。大急ぎで部屋に連れ戻り、一命を取り止めたことがあった。あまりに多数の死者が出、生命ある者まで死者扱いにされた件であったが、私の隊員ではなかった。

山の伐採作業で春になっていた。雪は四〇センチメートルほどあり、その中で焚火をすると穴があき、六人くらいが火を囲んで雪の上に具合よく腰掛けられた。この火で、朝もらった雑穀二スプーンほどをお粥に炊いてすするのであり、昼食用パンはもう朝食のとき食べてしまったのでない。補給できるのは、切り倒した松に実があればであるが、これまた滅多になかった。九月二十五日には降雪があり、翌年五月二十五日に最後の雪が降った。子供達の描くトマトの絵は、すべてが青い色で描かれている。それでもトマトは作ら

れるが、これは漬物として食用にせられるのみである。五月一日でタンポポが芽を一センチメートルほど出す。これから秋まで野に芽を出す雑草は日本兵の胃袋に納まってゆく。ビル、ニラなど、これらを見つけるときは喜んで飛び上がるほどであった。

秋は茸キノコ、これも場所によってない所もあるが、あるとき一面、足の踏み場もないほどの茸を見つけ、それまで一本一本と大切に取って来た茸全部を放り投げて「万歳」を叫んだことがあった。食事といってもスーブくらいで、労働などできっこない。休憩中の話題は、農村出身兵、秋田中心であったので、村祭、先祖法要のごちそう、その種類、作り方など、ゼスチャーを交えながら焚火を囲んで語り、落ちは「ダモイ(帰国)」で、毎日この繰り返しであった。

私の隊は二五パーセントの死亡率で、平均より一〇パーセントも高い。その一番の原因は、入所二カ月くらいするとき、三日分の糧秣を受領した。全部が吠に入っていた。炊事係があまりの軽さに中身を見ると、なんと高粱の麩、すなわち実を取りよけた穀である。

石川隊長以下全將校と、炊事でソ連側と交渉に当

たったが、彼らいわく「関東軍倉庫から当收容所が受け取った食糧であるから返品も交換もできない」と頑として応じない。さすがの松本中尉でもこのときは打つ手がなかったようだ。遂に泣き寝入りになってしまった。これに岩塩を入れスープにして三日間飲んだが、このため急激に体力が衰えるのが目立って、年末から昭和二十一年二月にかけて最悪の状態に突入する。それに先述の列車到着夜間緊急作業が待ち受け高率の死亡者が続出し、葬儀も合同で、これまたしばらく中止という状態までになり、所内死亡二〇七人、入院死亡二〇〇余人となった。

当時はソ連側の所長、大尉の赤ら顔が鬼のように見え、煮ても焼いても食えぬ奴であった。

ソ連側にも何かと心配してくれる將校、下士、兵もいたが、自国民の食糧にも事欠くときで、ソ連側ばかりを責められないかもしれないが、麩だけで三日分とは、三日間何一つ食べ物がなかったことである。

日露戦勇士の親切

水道工事作業に私が出た折、老人が一人、辺りに気を配りながら新聞包みを抱えて近寄って来た。「ズラースチ（今日は）」と挨拶を交わしたが、用件はよくわからない。しかし、彼が一心に手まねを交えて言う言葉は、「ヤスクニ」、「コックグルンター（土おこし）」、「ヤーマカバーチ（穴掘り）」と言い、両手でX（戦い）をつくる。この年齢から察すると日露戦争のことで、自分は捕虜になったと言っているのだと分かった。「クーシャチャマロマロ（食事が少ない）」。すなわち、靖国で穴掘り作業に従事し空腹でたまらなかつた。次に「ニッポンオカミサン、シンセツシンセツ」と言つて飯を握る真似をし、握手を求めた。

日本軍の捕虜となり靖国で穴掘り作業を強いられ空腹でたまらなかつた折、近所の女将さんからもらつた握り飯のことが忘れられなかつたのだ。新聞包の中には、一週間分の老人の配給が入っている。ソ連人はパンを運ぶのに何にも包まず裸で脇に抱えるのが通常であるが、見えないようにして日本兵に食べさせようと

持参し、「皆で食べよ」と言うのである。

四十年前の日露戦争——この老人は七十歳を越えていよう。余程嬉しかったのであろう。私共は現場に十数人しか居合わせなかったが、私はこれを押しただいて堅い握手を交わした。私自身には一回だけであったが、私の隊でもう一回、同様のことがあった報告を受けた。

また建築穴掘り作業中、あまり見かけたことのない若い十八歳くらいの兵がいるので、「お前、前からいたのか」と尋ねると、「先日この収容所に連れて来られました」と言う。「そりゃ知らなんだな、随分若いじゃないか」と尋ねると、「私は東京で敗戦の詔勅を聞きました少年志願兵です。父母が羅南に住んでいまずので、敗戦と聞いてとるものもとりあえず北鮮までたどり着きました。そこへソ連軍の侵攻ですぐ捕虜になってしまつて、知らない隊と一緒に連れられて来るうちに、ここコムソモリスク第五分所に入れられました。現在隣の隊の者です。本日、少尉殿と一緒に作業に出ました。またよろしく願います」と。これを

聞いて、人それぞれだなあ、東京で敗戦を迎え、シベリアに連れてこられるなんて全く不運な青年だと思つたが、その兵と会つたのはそれきりであつた。

母を思う兵士

こんなこともあつた。伐採に山に入り食事終了。当番が食事のカンカンを持ってアムールに洗いに行つた。いつもならもう帰る時間なのに帰らない。しばらく待っても見えないので、私が出かけた。すると、アムールに手をつけて動かない、川には氷は張つてないが非常に冷たく、手を入れれば凍るくらい冷たい。それなのに水中に手を入れたまま何かを考えている。

「オイ、何してるんだ、皆待っているぞ」と声をかけると、「隊長殿、すみません」とすぐ帰り支度をした。帰り道、「アムールは日本海に直通してますね」と言う。「そうだ」「新潟まで氷は切れていませんね」「そうだ」「私の家は新潟の山の中です。信濃川のずーっと上流の谷川が裏を流れ、そこに我が家の勝手があります。母は食後、そこで食器を洗います。今、当番で洗っていて、そのようなことを思つたら、何だ

か母親と一緒に食器洗いをしているような思いになって、冷たい水の中に手を入れていたのです」と言っていた。

私はこれを聞いて胸にこみ上げる思いにかられ、「故郷はなつかしいなあ、早く帰りたいものだ」と話しながら作業現場に戻った。忘れ得ざる一こまである。

このころ、収容所食堂入り口に桶を置き、松葉を七〇度ほどの湯に漬けて一昼夜置き、ビタミンCの補給に当て、飲まなければ食堂に入れないことにしたが、効果は確かであったようだ。

食堂窓口で皿に載せられた食べ物を受け取り、自分の場所に着いて皿を見ると、今もらったパンがない。どこで落としたかと思ったらそうではなくて、他の兵が素早く失敬してしまうので油断も隙もない。こんなことは日常茶飯事で、自分の受け取った食べ物からは絶対に目を離せない。目を離せば誰かに失敬され、他人の胃袋の中に流れ込んでしまう餓鬼道そのものの生活であった。

捕虜生活は全部で満三カ年であるが、この間、生活用消耗品が必要であったはずである。私らには、歯ブラシ、歯磨粉、用紙、鉛筆、ちり紙等の必需品一切全く配給なく、用便は木の葉、石、道路で拾う古新聞の切れ端、場合によると軍服の裏地を破って使う。これは冬困るので、たびたびはできない。時によると雪を握って便を拭く。零下四〇度で排便するので、肛門の便は凍ってジャリジャリと音を立てた。鼻をかむのは、手鼻である。三年間もやると相当上達するもので、自分でも感心するほどよくかめた。

欠かすことのできぬものにマッチがあったが、私は一度も人手できなかった。ところが兵達は生活力に満ちていた。昭和二十一年初めごろになると、ヤスリ、油石、ソ連防寒服の綿、小型鉄パイプで火縄を作り、これで火を起こし白樺の皮に移し焚火にする。雨、雪の中でも火を使い得たのである。また禪もなくなり、パンツの支給はないので直接袴下をはいた。煙草はマホルカと言う刻み煙草が主で、これは新聞紙に巻いて唾で止め吸うが、量はほんの少々であった、これも愛

煙家には欠かせないとみえ、パンと交換してでも吸っていた。

コムソモリスクで二十一年の夏過ぎころであったろうか、毎日の作業の苦しい思いを少しでも和らげようとして、慰安会を開く計画が主として炊事班の白井班長の提言で実現する運びとなった。以後、月に一回くらい、夜間などを利用して慰安会が催され、将、兵共々楽しむようになった。こういう計画が立てられると、隊内には思いのほか色々な人がいることがわかった。芸人も、画家も、文士も、案外にいるものである。

よく思い出せないが、『コムソモリスク夜曲』というものが作られた。大半は忘れてしまったが、その一節が思い出される。

『コムソモリスク夜曲』

ダモイ（婦国） トウキョウ についだまされて
つれて来られた 北の街

コムソモリスク 夕日が落ちりゃ

ヤボンスキー（日本人）の影法師

三節ほど作られて、一同でよく歌ったものである。

軍隊建制崩壊始まる

将校には帯刀が許されていたが、毎日の作業に持参することなく、将校室に置き作業指揮に当たっていた。昭和二十一年四月二十九日、天皇誕生日である。

作業開始時間をずらして営庭で全員整列し、皇居遙拝を行った。大隊長以下全員、服装は乱れているものの正規の整列をし、私は第四中隊の先頭に立って佩刀の礼をもって皇居遙拝を行った。これが軍刀使用の最後で、数日後、作業から帰ったら将校室内の軍刀は全部なくなっていた。不在中、ソ連軍将校が来所し一括持ち帰った由、これで一切の武装は完全に解除され、多くの丸腰になったのである。寺伝来の刀でなく、昭和刀でよかった。

四月半ばを過ぎると、降雪はあっても日溜まりはポカポカと暖かく上衣を脱ぐこともあり、木々の若芽も今まさに催さんとし、今年こそ帰りたいなと思いがらの連日の作業であったが、メーデーの五月一日から珍しく三日間の休みが与えられた。それまでは休みを

与えられた日は一日としてなかった。第一日は全員眠りにつき、食事、厠以外に起き上がる者はなかった。二日目の午前中も同様で、午後になると少々起き上がり、三日目になってようやく起き出し身辺整理を始めた。

隊長交代

このころまた移動があり、少佐の急造階級章（金筋が缶詰を切って作ってある）をつけたのが、あごひげを生やしてやって来た。まやかしたと言う者がいたが、彼の経歴を確認できる者はいなかった。これほどまでにして佐官にならねばならぬのか。

全将校協議の折、河野大尉は大隊長をこのマヤカシ者？に譲ると言い、この者が大隊長に就任したが、最も苦しかった初めの年末年始、四〇〇人近くの犠牲を出し、今、春を迎えた者はこのマヤカシ者に面従するのみで服従する者はいなかった。第四分所到着の折は大尉であった、と聞いたが、私には古い大尉の階級章の方が立派に思えた。

収容所は二重の鉄条網に囲まれ、中間への侵入は許

可なくして入れない。四隅には望楼があり、銃を携行せる監視兵が昼夜見張りをしている。何かの品物をこの中間に飛ばして無断で取りに入った兵が撃たれ負傷した。なぜ門衛に届け出、カンボリーの案内で行かなかったかと言ったが、後の祭りであった。

死者が出ると二〇人くらいを単位に追悼会を行った。私が僧侶であるので命を受け、一式取り扱った。大隊には八人ほど僧侶がいたが、私と同じく本願寺の田中伍長、新潟の大谷派の清水上等兵その他で、私の導師のもと本願寺式で「帰命無量寿如来」と、本山下付の御本尊を安置し、その前に僅かであるが、炊事からダンゴを作ってもらいお供えをし、唱和した。他宗の僧にも参加してもらったが、第七作業隊はほとんど私の導師で挙行した。この御本尊も終わりには自らの手で焼却せざるを得なかった。

この遺骸は全裸にされ櫛に積み原野に埋葬するのだが、墓穴を掘るのは作業不可能の病人で所内残留者に命ぜられるので、二日がかりでも一五センチメートルくらいしか掘れない。櫛で運んだ遺体はその中に並

べ、土と雪をうっすらとかける。夏になったら露出するほどであった。土の凍結したのはコンクリートよりも強靱で、病人では二日かかっても二〇センチメートルも掘れないのが現実であった。平成三年十月、ドラビヤンナヤ村でのテレビ放映を見たら一メートルほど掘っており、疑問に思った。焚火で溶かして掘ったと新聞に報じていたが、私どもの所ではそうでなかった。シベリア帰りの人も私同様、二〇センチメートルくらいしか掘れないのが本当だと言った。ところが、豊橋予備士官学校の同期会でこの話をしたら「俺らは夏の間掘っておいてそこへ埋めた」と言われた。晩秋に入ソし春までに死亡した兵士達はそんな夏は迎えてないので、私には理解できなかったが、さらに尋ねる時間もなかった。

第三分所支援

このような折、アムール河畔に五〇〇人収容の第三分所があり、この分所から救助応援を要請してきた。任務は、機能を失って食事も作り得ないとの情報なので、炊事班員を五人派遣した。一週間ほどして帰った

白井伝五郎軍曹は、「収容所に入ったら寂として声なく鬼気迫る思いでした、五〇〇人のうち二五二人の死亡で炊事する者すらおらず、死体の処理もできなく全員病臥の有様でした」と報告した。

息を引き取った者は全員全裸で、襦袢も袴下も禪まで外され、衣類は洗濯の後再使用されるのが実情である。

昭和二十一年も五月ともなればようやく木々に新芽も萌え出て捕虜にも元気が出、農場作業も始められる。除雪を裸でできるほど暖かい日もあり、野菜も勢いよく成長を始める。

しかし、食糧そのものは常に不足がちで空腹は常のことである。夏のある日、キャベツ畑の作業に出、直径二〇センチメートルほどのを一個失敬して表の葉を除き、それを一個全部食べた。もちろん塩など何もつけずムシャムシャと無心で食べた。本当にうまかったし、またよく食べられたものであった。

アクチブの活動

昭和二十一年も終わりころになると、共産主義によ

る教育がソ連当局直接でなく、「アクチブ（活動分子）」という、日本兵の中で社会主義的思考の者をソ連側が目をつけて結成し、赤化教育を施した構成員の集まりを作り、特別の待遇を与えて、一般兵を含め特に将校に向かって思想教育を開始し始めたのである。

かくて将校の反ソ、労働拒否の言動はいちいちソ連側に通報されるようになり、また『日本新聞』が張り出されるようになった。ある日、事務室勤務の青山軍曹が将校室に入るなり「私は今転出を命ぜられ直ちに出発いたします。理由は、将校の言動をいちいち報告することを求められたので断固拒否したところ、直ちに転出だと言われ、今出発します。このようにアクチブの力が強力になりつつありますから、皆さん十分注意して下さい」と言って立ち去った。このわずかな間には私は、軍曹に別れの言葉を述べた。軍曹は「少尉殿にお世話になった死亡者は二〇七人で、皆お経を上げていただきました、別に入院患者四〇〇余人おりましたが、そのうち二〇〇余人死亡で、第五分所としては四〇〇余人の死亡です。十分気をつけて下さい。お元

気で」と。私は「お互い会うことがもうないかもしれないが元気でやろう」と言い、別れた。それが最後であった。その後、青山八郎軍曹は他の収容所の金網の張られた部屋に入れられているという噂が流れたが、確認はできなかった。

我々もアクチブから一般兵と同様、便所掃除、水汲み、食器洗いを言われ、まず階級章を外すようたびたび強要されたが、松本主計、石川大隊長らを中心に相当長期にわたって階級章を外さなかった。しかし、『日本新聞』からやって来た、ペンネーム諸戸文夫（本名、浅原正基）らの幹部の圧力の下、「日本には婦さず白樺の肥やしにしてやる」という事件などがあって遂に外すことを申し合わせたか、いつであったかは覚えていない。（昭和二十二年三月、第五分所から追放になるのであるが、その折は階級章は着用したようにも思っている）

かくて昭和二十一年は暮れてゆくのであるが晩秋まで何の兆候もなく、完全に越年を覚悟せねばならなかった。しかし、一回もう大分慣れて、大きな事件も

起こらなかった。

建制崩壊について、後日、懲罰収容所で他隊將校が言うには、「入ソ一カ年ほどのとき、所内で靴の盜難が頻発した。不審に思いよくよく監視させたところ現場を見つけ、盗んだ兵を調べると、『私は盗みたくありませんが、ソ連の將校から呼び出しを受け、兵士の靴を盗むことを命ぜられました。私も監視されているので命令通り行うしかありません』と告白した。ソ連側はこのような手段まで弄して建制崩壊に努めたのである」と。このようにして強制に反対する反動將校なるものが造成されてゆくのであった。

かくてコムソモリスク第五分所との別れが近づくが、この間で心に残る思い出を二つほど。

農場ではキャベツ、馬鈴薯が特に採れた。あるとき倉庫で馬鈴薯の選別作業を土地の女性共々行っていた。すると急に音楽が流れてきた。私共は聞き入ったのみであったが、ソ連側の女性は音楽に合わせて踊り出した。さも愉快そうに踊るのである。こんな状況を見ていたある將校は「こと音楽に関して日本は百年遅

れているな」と言った。音楽に暗い私にはその判断力はない。

また、各種作業場を回っても人種差別、捕虜差別というものを感じない。作業についても十分意見を述べることが、最後になると「お前らは捕虜だから命に従え」と言う。軍人でも、兵が將校と言いつ争う場面を何度も見たが、兵も將校も十分議論して、最後に命令だと言つて行動に移つて行く。このようなことは我が軍には全く許されなかつたことである。

また捕虜をも差別しなかつた。私は昭和五十七年七月十六日墓参したが、各種の事情でソ連に帰化し日本に帰国しなかつた人もいた。また、ソ連女性との間に子供をもうけ帰国を断念した人のあつたことも、ソ連人一三〇種と言われ人種的偏見が少なかつたことに起因すると思う。私の墓参の折もハバロフスク市で三回の法要が行われたので、三人の導師は終日僧服で市内を巡回したが、こと服装に関しては誰人からも何の質問もなく、故郷の柳ヶ瀬を僧服で歩くよりも心は晴れ晴れとしていた。日本なれば僧服では出入りに随分気

を使うのであるが、そんな思いは全くなかった。

この墓参は全抑協で七月十五日、新潟空港を発ち、ハバロフスク、ブラーツク、イルクーツクにて法要（ブラーツク墓地は湖底に没したので船上法要）を行い、二十一日帰着した。ソ連にて公式に仏教僧が法要を挙行することができた第一回で希有のことだったのでNHKにより全国放映され、一般市民の参列者もあつた。導師を勤めたのは、私、宇和島の松井允人師、新潟の小林龍堂師であつた。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正九年五月二十五日

出生地と現住所 岐阜県羽島郡川島村松原島 西養寺

岐阜県揖斐郡大野町公郷 佛照寺

学歴 尾張中学校（旧制）

龍谷大学文学部佛教学科

軍歴 昭和十八年十二月一日 学徒動員に

て中部四部隊（岐阜）一中隊に入り
隊。

終戦後

豊橋予士に幹候十一期生として。福知山中部軍教育隊。昭和十九年渡満、虎頭の一一師団。二月に凶們南方の一二七師団の歩兵二八一連隊。四月に奉天の五四九部隊関東軍通信教育隊。八月十五日付にて陸軍少尉の任官式が終戦と同時となり、皮肉というか馬鹿馬鹿しい気もしたが、将校となつた以上は預かっている部下を各家庭に無事送らねば最後の任務を果たし終わらないと痛感されたあたりは、いかにも中島さんらしい人柄が偲ばれる。

延吉郊外の兵舎で帰国のため待機していた八月下旬、私たち重砲兵第三連隊（一二二五部隊）のうち、連隊本部、一大隊本部、一中隊、弾列中队は間島編成第七作業大隊として三宅少尉指揮下の四中隊に入り、以後

お世話になった。間もなく帰国のため二百キロ行軍が始まり、持てるだけの装具と、食糧は乾パンだけで、凶們、彈春を経て生まれて初めて見るソ満国境を通過した。日本海に面したポセツト灣に臨むクラスキーノという美しい田舎の村であった。ここでしばらく待って船で日本へ帰るつもりが、貨車に乗せられ十月上旬、ハバロフスク市の北方二五〇キロの街、コムソモリスク市に到着して、氏の書かれた『ソ連抑留』のおりの三年間でした。

帰国後、私は、三宅少尉がもしも元気で生きて帰っておられれば、是非一目お会いいたしたいと思い、あらゆる機会に、本などに「三宅正教」という活字を探したがついに見当たらず、おまけに三宅さんの出身県、

職業、学歴などを聞く機会がなかっただけに、全く調べる手立てもなかったのである。ところが、復員後四十何年もたったある日、突然に電話をいただいた。「山本さんですか？ 僕です。中島ですよ」と言われてもサッパリ分からない。「ハア、ハア」と言うだけでしたが、やがて、三宅さんは帰国後、中島家を継いだのである。しかも浄土真宗西本願寺派の佛照寺の住職としてである。

平成九年の愛媛県の慰霊碑建立には御夫婦で高額の寄付をいただき、財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部の設立に際しましてもお二人で入会して下さいました。抑留中の困難のとき、引揚後四十年以上後に始まった交際を通じて、円満な人柄と

情愛こまやかな人格で、遠く県外から愛媛県支部の運営に御協力をいただいております。

どうぞお二方、いつまでもお元気で暮らし下さるようお祈り申し上げます。

(愛媛県 山本 繁夫)

シベリア抑留記

福岡県 白石 壽

昭和二十(一九四五)年八月九日、ソ連軍は不可侵条約を不法に破棄して、満州全土に侵入して来た。八月十五日、満州鏡泊湖にて敗戦に至り、武装解除となる。独立自動車第一一四大隊、吉林省敦化集結。中隊長梶川峰夫中尉、大隊長湯浅正美大尉、富永中將の指揮下に入る。幕舎生活。昭和二十年十月ごろ、渡辺中尉以下二〇〇〇人、敦化出発。牡丹江、東京城、寧

安、石頭、海林、興隆、掖河。貨車に乗りソ連軍の監視。掖河駅から綏芬河、ハバロフスク、イルクーツク、チタ、タイセット駅から二二キロの第二収容所に着。屋根のない収容所。大隊長は渡辺政雄中尉。私は第一中隊。中隊長は近藤鳩三少尉でした。

作業は森林伐採、幕舎造り、石灰山の作業。毎日、ソ連兵が自動小銃を持つての監視つきです。シベリアの十一月は寒い。朝八時集合。全員各々作業に行き、八時間の重労働。食料は一人一日黒パン三五〇グラム、コウリヤン入りのスープ、野菜少々。労働はソ連兵の監視厳しく、健康でない人は栄養失調になり、無念の思いで毎日淋しい収容所の生活を送る。作業のノルマが上がらねば食料はもらえず、第二収容所では六〇人が病氣、栄養失調で死亡しました。死体は立派に埋葬しました。遺品の一つももらえないのが残念でなりません。ソ連では、働かざる者は食うべからずということがあります。

昭和二十年十二月半ば、第二収容所は閉鎖され、全員各作業大隊に行くことになり、中隊長は小山中